

第72話 (59頁) ふたりの猟師

ふたりの猟師がクマの子をとりに森に出かけた。ひとりが谷間のクマのあなに
入りこみ、そこから大声で、「クマをつかまえたぞお!」

「こっちにつれてこい!」

「だめだ、動こうとしない。」

「じゃあ、ひとりで来い!」

「だめだ、放してくれない。」

「二人の猟師の掛け合いでストーリーが展開する。とてもテンポがよく、状況が生き活きと
伝わってくるよ。」

「短い二人の会話だけで構成され、絶妙の間合いと筆致だ。それも、ユーモア感たっぷりで、
子どもたちも思わず笑ってしまうのではないか。クマってとても怖い動物なのに。」

「最後が決まっている。『だめだ、放してくれない』。やっとな真相がわかって、なーんだ、そ
ういうことだったのか、と。」

「この会話、『クマをつかまえたぞ』から始まるけど、違うじゃないか、本当はクマに捕ま
えられたんだ、と子どもたちも受け止めて、にんまりとほくそ笑む。」

「クマの大人ではなく子どもを捕りに行った、というところがポイントだ。そうでなければ、
大胆にクマの穴に入り込むなんてできることじゃない。」

「大人グマを狙うなら猟銃も持って行くだろうに、ここでは手ぶらみたいだし…」

「話が短いこともあって、授業中の息抜き、という印象を持った。トルストイも特別のメッ
セージを込めてはいなかった気がするよ。」

「この後、どうなったか。ずっと放してはくれず、子グマか親グマに食べられた、なんてい
う悲惨な結末は絶対に考えられない。」

「確かに。どこにも残酷感がうかがえないからね。」